

橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究報告（国語科1）

—国語科における ICT 活用による授業観の変容に着目して—

富山 敦史・佐野 智子（常葉大学教育学部附属橘小学校）

要旨：本稿は、常葉大学共同研究 2020 年度ならびに 2021 年度「橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究 —ICT 活用による授業観の変容に着目して—」における国語科に関わる部分についての現時点（2021 年 7 月）迄の取組と今後の取組についての報告である。国語科では「学習指導要領の改訂（指導計画作成上の配慮事項）を踏まえる」「GIGA スクール構想の実現をめざす」を前提に、インクルーシブ教育の推進（多様な学習環境の提供）と障害をもつ児童生徒への配慮事項（合理的配慮の提供）を実現するための多様な学びの実現のためのツールとしての ICT の活用を目指した実践研究を行う。2021 年 7 月迄の実践では、一人一台端末導入期の児童の実態と授業展開上の課題を提示し、2021 年 9 月以降では、授業者が児童を学びのユニバーサルデザイン（UDL）のガイドラインをポイントにした授業実践・授業支援を実施、評価していくことを示した。

キーワード：GIGA スクール構想、ICT、デジタル教科書、個別最適化、支援

1. はじめに

○2020 年度

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、大学は 5 月まで入構制限が行われオンライン授業となり、附属橘小学校も 3 月から 5 月末まで一斉休校・分散登校となった。このため共同研究は、学校再開後の 6 月から附属橘小学校の現状を確認することから開始した。9 月に大学教員と小学校教員との間で、研究計画の説明および今後の予定等の意見交換を行った。国語科では、新型コロナ感染の拡大に伴い GIGA スクール構想の前倒しがすすめられる中で、次の項目を共同研究の前提として設定し、実践研究を開始した。

1. 学習指導要領の改訂（指導計画作成上の配慮事項）を踏まえる

- ①インクルーシブ教育の推進（多様な学習環境の提供）
- ②障害をもつ児童生徒への配慮事項（合理的配慮の提供）

2. GIGAスクール構想の実現をめざす

①一人一台PCと高速通信整備の実現

②多様な学びの実現のためのツールとしてのICTの活用

具体的な取組としては、GIGA スクール構想の実現に伴う指導者用及び学習者用デジタル教科書・教材の導入が促進される状況の中で、小学校教員の希望も踏まえて、橘小学校で採択教科書（学校図書）の担当者を講師とした研修会（2020年11月10日）を行い、デジタル教科書の特性及び使い方等を学んだ。

これにより、橘小学校の多くの教員が指導者用デジタル教科書だけでなく、学習者用デジタル教科書・教材の利点（読み上げ機能やハイライト、個別最適化カスタマイズ等）を学び、児童の特性に応じた深い学びの実現可能性を実感することができた。以下教員の感想を抜粋で記す。

- ・ 巻物の機能を使って指導してみたい、便利だと思う。
- ・ 挿絵の加工ができることがわかり、便利だと思った。
- ・ 視覚に課題のある児童の指導に役立ちそう。
- ・ ①②③・・・と本文に形式段落番号をつけるので定型機能があることは便利である。
- ・ マウスで文字を書くのは大変だと思った。
- ・ デジタル教科書以外の機能（教材機能等）もあることがわかった。
- ・ 音声で読み上げている部分をハイライトで追ってくれるので助かる子がいそうだ。
- ・ デジタルとノートの併用の仕方を考えてみたい。
- ・ 国語科デジタル教科書を使ってみたい。全学年導入が無理ならまずは試験的にある学年だけ入れて使ってみたい。

以上のように、デジタル教科書の利便性や児童の支援への可能性に言及する肯定的意見が多く、デジタル教科書を使用した実践に対する期待度の高さが窺える。研修会を終えて、以下の3点が今後の課題として示された。

- ・ 児童の学びに資するデジタル教科書の活用方法の具体的検討
- ・ 児童の多様な学び（個別最適化）のニーズに対応できるICT環境の整備
- ・ ICTを活用できる教員養成に関わる教育実習のあり方の検討

しかし、この時点では橘小学校には、児童用端末やWi-Fi環境が導入、整備されていなかったため、「パソコンが固まってしまい動かないことがあるので、デジタルを使いたくないと思ってしまう。」との意見もあり、具体的な導入や授業での実証研究の計画立案にまでには至らなかった。

その後、2021年度授業開始前までに、橘小学校におけるWi-Fi環境整備と児童一人一台のiPad導入が実現することになったため、大学教員からは、授業開始に備えてiPadを用いた児童の学びの支援に資するアプリや実践事例、研修会研究会情報等を紹介し、大学と小学校との情報共有につとめた。

2. 2021年度研究実践の概要

○2021年度研究テーマ

「読み書きに課題を抱える児童を中心に据えたデジタル教科書やiPad等のICT機器やアプリを活用したUD(ユニバーサルデザイン)の観点にたった国語科授業の構築の基盤づくり」

2021年度は、整備された橘小学校の通信環境下で、多様なニーズをもつ児童の学びに資するICT活用的一端としてのデジタル教科書・教材等の活用を実践研究する。GIGAスクール構想下では授業において児童が端末を扱うことがスタンダードとなり、従来型の授業で学びに困難を抱えていた児童への支援の切り札となる。一方、端末の扱いや使い方等で混乱を生じ、却って学びに困難を抱える児童も出てくる可能性がある。本研究では児童の実態に即して、それぞれの児童が自らの学びの困難を軽減し、深い学びを実現していく過程を、対象学年を絞り込んで実証的に研究し、児童の学びに資するICT活用の具体的要素、教員としての留意点、授業構成のあり方を明らかにしていく。

○研究の概要

国語科において、2年生2クラス(42人)にデジタル教科書(指導者用と学習者用)を導入し、2年生担任団とともに、読み書きに課題を抱える児童を中心に据えつつ、デジタル教科書やiPad等のICT機器やアプリを活用したUD(ユニバーサルデザイン)の観点に立った国語科授業の構築を進めるための基盤づくりを行う。これによって読み書きに課題を抱える児童の学習への意識を向上させるとともに、具体的な学力や自己肯定感の向上が期待される。またこのことを前提に教育活動を進めることは、インクルーシブ教育の視点をもった教員の授業意識の改革、授業の質の向上に繋がっており、UD(ユニバーサルデザイン)の観点に立った国語科授業構築の基盤を作ることができる考える。さらに、教員養成課程の学生複数名による授業支援を実施することで、児童一人ひとりの課題に応じた対応が可能になると考える。これらにより、読み書きに課題を抱える児童以外の児童の学習に向かう意識も高められ、学級、学年における児童の学習に対する意識の向上が期待される。これらのことは、現職教員だけでなく、将来教壇に立つ学生の授業づくりへの意識改革と指導の技術・技能の向上にも貢献するものと考えられる。

○研究仮説

国語科において、読み書きに課題を抱える児童に対し、デジタル教科書(個人設定可能な学習者用)やアクセシビリティの多様性に対応できるiPadおよび支援アプリ等、ICTを活用した個別最適化を念頭においた授業展開、授業支援をすることで、以下の2点の実現が可能になると考えられる。

- ①児童の学びに資するICT活用の具体的要素、教員としての留意点、授業構成のあり方を導き出すことができる。
- ②読み書きに課題を抱える児童の学力や自己肯定感を高めるだけでなく、学級や学年における児童の学習に対する意識の向上が期待されるとともに、教員の授業改革意識の向上、とりわけUD(ユニバーサルデザイン)の観点に立った国語科授業構築の基盤を作ることができる。

○研究計画(2021年度)

・2021年

- 4月～ 5月 児童とICT環境の実態把握
- 6月 デジタル教科書の導入、iPad等での支援の試行
- 7月～ 8月 授業構想と支援の具体化の検討
- 9月～10月 授業実践・授業支援の実施と分析
- 11月～12月 授業実践、成果の中間発表(学会発表、学会誌等への投稿)

・2022年

- 1月～ 2月 研究成果のまとめ
- 3月 次年度への課題のまとめ

※学会発表(常葉大学初等教育課程「学内学会」11.27予定)

※投稿予定(『常葉初等教育研究』2022.3・『教育研究実践報告誌』2021.9・2022.3)

○具体的取組

①実態に基づく支援の可能性を探る(スクリーニング等のアセスメントの実施)

基本的には学級担任の見取りによる実態把握を主として具体的な支援計画を構築していくが、必要に応じて以下のものを保護者(本人)の同意を得て実施したい。

- ・LCSA(学齢版言語・コミュニケーション発達スケール 学苑社)
- ・CARD(包括的領域別読み能力検査 榊スプリングス)
- ・ELC(読み書き困難児のための音読・音韻処理能力簡易スクリーニング検査 図書文化)

②デジタル教科書の可能性を探る(児童の実態に資する使い方を試行錯誤する)

- ・榊学校図書デジタル教科書(指導者用・学習者用)をiPadに導入し、授業構築の可能性を探るとともに、個別最適化の観点から活用する。

③児童の学びに資するiPadの活用方法を探る

- ・児童用iPadにインストールされたアプリを活用した授業構築の可能性を探るとともに、個別最適化の観点から活用する。

④デジタル教材の活用

- ・AIドリル(国語・算数)等のデジタル教材を個別最適化の観点から考察、検討する。

⑤小学校管理職の指導・助言のもと、学級、学年等、学校ぐるみで、①～④の課題や留意点を共有し、UD(ユニバーサルデザイン)の観点に立つ授業構築方法について探究する。

⑥授業支援者としての学生との意見交換、質問紙調査及びインタビューを含む省察(リフレクション)を行うことで、UD(ユニバーサルデザイン)の観点に立つ授業構築方法について探究する。

3. 具体的実践（2021年4月～7月 2年1組）

①学級担任の願い

小学校は、どの子にとっても安心して生活できる場所であり、仲間とともに学ぶ喜びがあり、自分のよさを自覚する場所でありたいと願う。子供たちは本来、やりたいことや学びたいことがあり、そのための手順や時間が保証され、ともに学ぶ仲間や教師がいれば、自ずとやる気をもって課題を追究していく。学級担任としては、まずこのような主体的に学び合う子どもの姿を大事にしていきたい。また、教員や学級の仲間からほめられたり、認められたりすることが、子どもが自分のよさを自覚する機会になり、自己肯定感の積み上げにつながっていく。子どものよさに目を向け、子ども自身のよさを自覚させる営みをあらゆる場面において設定していくことが必須条件となろう。発達の速度や表れる姿は様々でも、どの子もできるようになりたいという思いがあると信じてかかわり、結果だけでなく、その過程において、子どもが自ら成長しようとする「意欲」を見取り、大切にしていきたいと願っている。

本学級2年1組の児童21名は、授業にまじめに取り組む子が多い。また、できるようになりたい、がんばりたいという向上心をもっている子が多い。その反面、自分の考えはもっていても、挙手・発表に消極的な子がいる。また、基礎学力には個人差がみられる。今年度、GIGAスクール構想において、全校児童が一人1台のタブレット端末(iPad)を持つこととなった。今はまだ使い方に慣れる程度であるが、視覚的・聴覚的により分かりやすい授業をめざし、個々の様々なつまづきを知り、それぞれの特性に合わせた配慮や指導に役立てていきたい。授業において、児童一人一人がタブレット端末を使用することになったことで見えてきた成果と課題を明らかにすることで、今後のより効果的な使い方やICT機器の活用における個別最適化をめざすための手がかりとしたい。

②指導の実際

2021年5月下旬よりタブレット端末(iPad)を授業の中で以下のように使用した。なおiPadに当初からインストールされている授業支援アプリはロイロノートで、ここではiPadとロイロノートのログインを手始めとして、児童がICT機器の使い方に慣れ、親しむことを第一の目標にした。

◆国語◆

- ・物語文「スイミー」では、段落数を、ロイロノートの付箋機能を使い、共有した。また、お気に入りの場面を共有した後、その理由を口頭発表した。
- ・話す題材「はじめたよ、こんなこと」では、2年生になって新しく始めたことについての文章を書き録音機能を使い発表の練習をしてからクラスで伝えあった。
- ・調べて書く題材「しらべよう まとめよう生きものの一生」では、図鑑の他、インターネット機能を使い、生きものの育ち方を調べた。調べたことをもとに、ノートに文章を書いてまとめ、その文章を写真機能で撮影し、友達と読み合い、感想を伝え合った。

- ・説明文「たこのすみ いかのすみ」において、ロイロノートの付箋機能を使い、問いの文・答えの文が書かれている段落を見つけ、共有した。まとめには、たこやいかのすみの吐き方や敵からの身の守り方についての動画を視聴し比べ、書かれている文章を実感した。
- ・言葉を聞きとる題材「たからさがしにちょうせん」では、教科書の絵を写真機能で撮影後、ヒントになる言葉をよく聞きながら、画像の絵の中の宝を探しペン機能でしるしをつけて見つけた。

◆算数◆

- ・工夫して計算する問題では、ロイロノートの付箋機能を使い、()をつける箇所を考えたり、工夫した計算の仕方を説明し合ったりした。
- ・「たし算やひき算のひっ算」では、ロイロノートの付箋機能を使い、繰り上がりや繰り下がりの計算の仕方を説明したり、まちがえた計算を直したりした。
- ・「数のあらし方やしくみをしらべよう」では、教科書掲載の「数直線」を写真機能で撮影し、その画像を拡大して細かなめもりを読む練習をした。

◆生活◆

- ・町探検に出かける時にタブレットを持参し、お気に入りの場所や物を写真に撮り記録し、振り返り活動やまとめる活動に使用した。
- ・栽培活動で育てた野菜の成長を写真に撮り、記録していった。
- ・NHK for schoolおばけの学校たんけんたん「大きくなってね わたしの野菜い」を視聴して野菜の育て方を学んだ。

◆図工◆

- ・自分の作品（粘土、絵画）を写真に撮り、全体で共有しながら鑑賞した。
- ・造形活動「わっかで へんしん」や「しんぶんしとなかよし」では、製作後に互いに作品の写真を撮影し合い鑑賞した。

◆その他◆

- ・自分の健康状態をロイロノートの付箋機能を使って書き朝の健康観察を行った。
- ・道徳では、教科書を使い一斉授業を行った後、自分自身を振り返る場面でロイロノートの付箋機能に考えを記入し、共有し合った。
- ・2021年7月からは国語科でデジタル教科書（指導者用ならびに学習者用）を導入し、文章の書き方・まとめ方の題材「原稿用紙の使い方」を学習した。

③これまでの成果と今後の課題

◆成果◆

- ・一人1台のタブレット端末を使うことにより、子供たち一人一人の興味・関心が高まった。自分で操作することで、自分ごととして授業に参加することができた。挙手や発表が苦手な子にとっても、自分の意見を提出しやすく、全員で共有でき、授業に参加しやすくなった。
- ・回答を共有することで、一斉に友達の考えを知ることができた。
- ・読みや書きが苦手な子、特別な支援が必要な子など自分のペースに合わせて学習しやすくなった。

- ・ 指導者は、個々の児童の進度の差やつまづきを、より把握しやすくなった。
- ・ 図工の作品など、写真を撮り保存したものを子供も指導者もいつでも見ることができ、振り返りやまとめ、評価に役立てることができた。

◆課題◆

- ・ 入力や操作に個人差があり、授業内における時間配分を考える必要がある。
- ・ ローマ字は3年生で学習するため低学年(1, 2年生)では、キーボードを使ってローマ字入力ができない実態がある。指を使った手書き入力では、書かせる内容や量も制限されてしまうため、鉛筆やノートとの併用やデジタルペンの使用について検討が必要である。
- ・ 児童が自身のタブレット画面を見ることがこれまでよりも多くなった。相手を意識した聞き方や話し方 (うなずく、話し手を見るなど) について 見直しや改善が必要である。
- ・ 机上进行整理整頓し、教科書やノートと併用しながら、iPad を効率よく学習用具として使えるようにしていく必要がある。
- ・ 指導者が、ICT 機器を使いこなす技術を身に付け、授業改善をする必要がある。
今後、一斉、個別、協働の様々な学習活動の中で ICT を活用し、どの子にとっても学びやすく、学びを深めていけるようにしていきたい。また、7月に導入された国語科デジタル教科書のカスタマイズ機能(拡大、書き込み、保存、音声による読み上げ、色分け、ルビふりなど)を十分に活用し、個々の児童の様々なつまづきに対応し、支援の可能性を広げていきたい。9月からは、初等教育学課程学生による授業支援の力も借りながら授業改善をめざしたい。

4. 今後の取組について (2021年9月～)

本研究「橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究」の眼目に「現代的・実践的な教育養成」^{注1}がある。これは令和3年1月26日に示された中央教育審議会答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」^{注2}に示された

- ・ 技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている
- ・ 子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている

のような「令和の日本型学校教育」を担う教師の資質能力の在り方に加えて、「「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方」^{注3}(中央教育審議会への文部科学大臣の諮問 令和3年3月12日)の諮問内容(GIGAスクール構想により整備されるICT環境の活用と、小学校における35人学級をはじめとした少人数によるきめ細かな指導体制の整備を両輪として進め、個別最適な学びと協働的な学びによる「令和の日本型学校教育」を実現するための、教職員の養成・採用・研修等の在り方)の実現を踏まえるものとして想定している。現職教員の研修と教員養成

課程学生の養成については、とくに以下の①、②^{注4}の事項の追究を念頭において、教育現場での取り組みを進める。

①個別最適な学び（「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念）として、

【指導の個別化】基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、

・支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う。

【学習の個性化】基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する。

これらの前提には「「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる」がある。

②協働的な学び

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え持続可能な社会の創り手となることができるよう必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要。

・集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出す。

上記を踏まえて、9月以降の実践研究では、米国 CAST (Center for Applied Special Technology) が作成した UDL (Universal Design for Learning) 「学びのユニバーサルデザイン」のガイドライン^{注5}をポイントとして、「1. 授業者の視点」「2. 授業支援者(学生)の視点」「3. 児童の視点」「4. 授業構成の視点」の4つの観点から授業実践・授業支援を実施し、評価していきたい。

「学びのユニバーサルデザイン(UDL)」のガイドラインは、表1のように、教員(支援者)が提供するものとして、3つの原則「取組のための多様な方法(感情のネットワーク「なぜ」学ぶのか)」「提示(理解)のための多様な方法(認知のネットワーク「何を」学ぶのか)」「行動と表出のための多様な方法(方略のネットワーク「どのように」学ぶのか)」が示され、それぞれの原則のもとには、「アクセスする」→「積み上げる」→「自分のものにする」→「ゴール」(学びのエキスパートとは…)というように段階的に、ガイドラインとチェックポイントが挙げられている。

「取組のための多様な方法(感情のネットワーク「なぜ」学ぶのか)」の原則には、ガイドラインが「興味をもつ」→「努力やがんばりを続ける」→「自己調整」→「目的を持ち、やる気がある」へと提供することが示されている。

「提示（理解）のための多様な方法（認知のネットワーク「何を」学ぶのか）」の原則には、ガイドラインが「知覚する」→「言語、数式、記号」→「理解」→「いろいろな学習リソースや知識を活用できる」へと提供することが示されている。

「行動と表出のための多様な方法（方略のネットワーク「どのように」学ぶのか）」の原則には、ガイドラインが「身体動作」→「表出やコミュニケーション」→「実行機能」→「方略的で、目的に向けて学べる」と提供することが示されている。

表1 「学びのユニバーサルデザイン(UDL)」のガイドライン

学びのユニバーサルデザイン(UDL)ガイドライン			CAST Until learning has no limits			
	取り組みのための多様な方法 を提供しましょう <small>感情のネットワーク 「なぜ」学ぶのか</small>	提示（理解）のための多様な方法 を提供しましょう <small>認知のネットワーク 「何を」学ぶのか</small>	行動と表出のための多様な方法 を提供しましょう <small>方略のネットワーク 「どのように」学ぶのか</small>			
アクセスする	興味を持つ <small>ためのオプションを提供する (7)</small> <ul style="list-style-type: none"> • 個人の人々の選択や自主性を最適にする (7.1) • 自分との関連性・価値・真実味を最適にする (7.2) • 不安要素や気を散らすものを最小限にする (7.3) 	知覚する <small>ためのオプションを提供する (1)</small> <ul style="list-style-type: none"> • 情報の表し方をカスタマイズする方法を提供する (1.1) • 聴覚情報を、代替の方法でも提供する (1.2) • 視覚情報を、代替の方法でも提供する (1.3) 	身体動作 <small>ためのオプションを提供する (4)</small> <ul style="list-style-type: none"> • 応答様式や学習を進める方法を変える(4.1) • 教員や支援テクノロジーへのアクセスを最適にする(4.2) 			
積み上げる	努力やがんばりを続ける <small>ためのオプションを提供する (8)</small> <ul style="list-style-type: none"> • 目標や目的を目立たせる(8.1) • チャレンジのレベルが最適となるよう(課題の)レベルやリソースを変える (8.2) • 協働と仲間集団を育む (8.3) • 習熟を助けるフィードバックを増大させる (8.4) 	言語、数式、記号 <small>のためのオプションを提供する (2)</small> <ul style="list-style-type: none"> • 語彙や記号をわかりやすく説明する (2.1) • 構文や構造をわかりやすく説明する (2.2) • 文字や数式や記号の読み下し方をサポートする (2.3) • 別の言語でも理解を促す (2.4) • 様々なメディアを使って回解する (2.5) 	表出やコミュニケーション <small>のためのオプションを提供する (5)</small> <ul style="list-style-type: none"> • コミュニケーションに多様な媒体を使う(5.1) • 制作や作文に多様なツールを使う(5.2) • 練習や実践での支援のレベルを段階的に調節して高機能性を伸ばす (5.3) 			
自分のものにする	自己調整 <small>のためのオプションを提供する (9)</small> <ul style="list-style-type: none"> • モチベーションを高める期待や信念を持てるよう促す (9.1) • 対処のスキルや方略を促進する(9.2) • 自己評価と内容を伸ばす (9.3) 	理解 <small>のためのオプションを提供する (3)</small> <ul style="list-style-type: none"> • 背景となる知識を活性化または提供する (3.1) • パターン、重要事項、全体像、関係を目立たせる (3.2) • 情報処理、視覚化、操作の過程をガイドする (3.3) • 学習の転移と般化を最大限にする (3.4) 	実行機能 <small>のためのオプションを提供する (6)</small> <ul style="list-style-type: none"> • 適切な目標を設定できるようガイドする (6.1) • プランニングと方略の向上を支援する (6.2) • 情報やリソースのマネジメントを促す (6.3) • 進捗をモニターする力を高める(6.4) 			
ゴール	学びのエキスパートとは... <table border="1" style="width:100%; text-align:center;"> <tr> <td style="background-color:#2e8b57; color:white;">目的を持ち、やる気がある</td> <td style="background-color:#4b0082; color:white;">いろいろな学習リソースや知識を活用できる</td> <td style="background-color:#0070c0; color:white;">方略的で、目的に向けて学べる</td> </tr> </table>			目的を持ち、やる気がある	いろいろな学習リソースや知識を活用できる	方略的で、目的に向けて学べる
目的を持ち、やる気がある	いろいろな学習リソースや知識を活用できる	方略的で、目的に向けて学べる				

udlguidelines.cast.org | © CAST, Inc. 2018 | Suggested Citation: CAST (2018). Universal design for learning guidelines version 2.2 [graphic organizer]. Wakefield, MA: Author.

2021年7月までの実践（「3. 具体的実践」）で示された課題と成果を踏まえ、ICT機器ありきの授業構築に囚われず、授業者が、これまで積み上げられてきた先行実践の知見および授業構築の基本的姿勢に立ちかえって、児童をきめ細やかに見取り、その課題を明らかにしつつ、どの子にとっても学びやすく、学びを深めていけるようにICTを活用して支援の可能性を広げていくことが重要である。このことは、今後教員となっていく教員養成課程の学生にとっても必要不可欠な実践的課題となる。

注

注¹ 常葉大学共同研究 2021年度「橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究」の「研究目的」からの抜粋

①小学校教員養成を主とする初等教育課程として、GIGA 構想を踏まえ「教科教育」に対する教育研究、実践を行う。大学教員、小学校教員だけでなく、大学で教科教育法の授業を受けている学生や特別研究に係る学生も加わることで、授業で学んだ内容を附属小学校で実践する機会を学生に与える。

②大学教員、小学校教員、学生が連携し、デジタル教科書・iPad 等を活用したより現代的で実践的な研究を行い、大学教員、小学校教員、学生の教科教育に対する知識・技能の向上を図る。必要に応じて、大学教員、小学校教員が研究会、学会等に参加・発表することを通して、教科教育研究に役立て、教職課程の授業及び小学校授業の改善につなげる。

③教育学部附属小学校としてふさわしい教育・研究環境を整備する。大学に導入されている教材や教具と同じ環境を橘小学校に用意し、大学で研究した内容に基づいた授業実践を行えるようにする。同時に、小学校教員にも導入された ICT 教材や教具を活用してもらい、意見交換、質問紙調査及びインタビューを含む省察(リフレクション)を行うことで、よりよい授業のあり方を探る。

④教育学部及び橘小学校の連携による成果を公表する。教育関連学会での発表、論文投稿だけでなく、誰でも閲覧可能なようにウェブ上でも公表する。これらにより、様々な教育研究を行っていることを知ってもらい、今後の教育学部及び橘小学校への入学者の増加へつなげる。

⑤橘小学校への ICT 関連の教材や教具の導入により、学生は当たり前になる ICT 環境を踏まえた「初等教育実習Ⅰ」及び「初等教育実習Ⅱ」が可能となる。卒業後、学校現場で評価の高い教員養成を目指し、教員になるなら常葉大学ということをより確実なものとする。

注² 「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」 (https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf) 2021年8月22日閲覧

注³ 「「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方」 (https://www.mext.go.jp/content/20210312-mxt_kyoikujinzai01-000013426-1.pdf) 2021年8月22日閲覧

注⁴ 上記注²の「2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿」参照

注⁵ 「学びのユニバーサルデザイン (UDL)」 (Universal Design for Learning) とは、アメリカ CAST (Center for Applied Special Technology) に示された学習科学に基づく三つの原則により構成化された指導のフレームワークのことである。「学びのユニバーサルデザイン (UDL) ガイドライン」 udlguidelines.cast.org | © CAST, Inc. 2018 | Suggested Citation: CAST (2018). Universal design for learning guidelines version 2.2 [graphic organizer]. Wakefield, MA: Author.

(https://udlguidelines.cast.org/binaries/content/assets/udlguidelines/udlg-v2-2/udlg_graphicorganizer_v2-2_japanese.pdf) 2021年8月22日閲覧

付記

本研究は、常葉大学 2020 年度共同研究（橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究 代表者：出口憲）ならびに 2021 年度共同研究（橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究 —ICT 活用による授業観の変容に着目して— 代表者：富永弥生）の研究助成を受けたものである。